

2013年度 法科大学院 第2回未修者入学試験問題 (小論文方式)

試験時間90分

注意事項

- イ) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- ロ) この問題冊子の1～4ページに問題が掲載されています。
- ハ) 試験時間中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- ニ) 解答は必ず解答用紙に記入してください。下書き用紙は回収しません。(解答用紙取り違えの申出には一切応じません)
- ホ) 参照は不可となっています。
- ヘ) 解答用紙の取替え、追加配布はしないので、汚したり折り曲げたりしないこと。
- ト) 試験問題の内容等について質問することはできません。
- チ) 問題冊子の余白等は適宜使用して構いません。
- リ) 試験終了後、問題冊子、下書き用紙は持ち帰ってください。
- ヌ) 故意・過失を問わず、解答欄に受験者の氏名又は受験者を特定すると判断される余事記載のある解答は無効となります。

下記の文章を読んで、設問に答えなさい。

ウェブ情報爆発の時代

近年、インターネット経由の情報が周囲にますます溢れるようになったと痛感している人は多いでしょう。果たしてこれを喜ぶべきでしょうか。悲しむべきでしょうか。

以前は得られる情報といえば、職場や学校で与えられるものや内輪のうわさのたぐいをのぞくと、せいぜいテレビ、ラジオ、新聞、雑誌くらいからのものでした。それらのマスコミ情報はだいたい似たりよったりで、それゆえ共通の話題には事欠かなかったものです。大晦日はみんなNHK紅白歌合戦を観ることが「国民的」な習慣でした。

けれども今や、パソコンや携帯電話を通じてどんどん多様な情報が流入してきます。衛星放送が普及しテレビのチャンネル数も増えて、紅白歌合戦の視聴率も下がってしまったそうです。新聞にもテレビにも関心がなく、ひたすらネットの情報のみに耽溺している若者の姿はもはや少しも珍しくありません。

彼らは何をしているのかと言えば、ブログと呼ばれる日記をウェブ上でつぶったり、気になる他人のブログを読んだりすることが多いようです。「2ちゃんねる」などの公開掲示板も人気がありますが、会員だけが参加できる「SNS(Social Networking Service)」というウェブ・コミュニティで活躍している人も少なくありません。代表的なSNSである「mixi」では、仲間との情報交換にのめり込み、朝から晩までひっきりなしにパソコンの前に座りつづけ、疲れ果ててしまう人もいます。もはやmixi中毒というわけです。

またある人のお気に入り、自作や他作の動画映像をウェブに公開している「ユーチューブ」という米国のサイトで、毎日そればかり観ているということでした。これは誰でも投稿参加でき、著作権などお構いなしで、自分のビデオに録画してある番組やコマーシャルなどをウェブで流せるわけです。当然、放送局からの抗議・取り消し要求も殺到するのですが、映像のなかには投稿者が自発的に数時間たつと消してしまうものも少なくないので、いたちごっこが続きます。そういう不安定性がまた人気を呼ぶのです。

ウェブの影響力は決してあなどれません。面白いと評判になったブログにはアクセスが集中し、制作者はたちまちマスメディアで活躍する評論家のような地位を獲得します。ウェブのロコミ情報で人気の出たマイナーな音楽がベストセラーになることもあります。SNSで高まった評判がついに映画配給会社を動かし、劇場公開された映画もありました。ボランティアで制作・維持されている「ウィキペディア」というウェブ上の百科辞典は、すでに信用が高く、今や最もよく利用される百科辞典の一つになりつつあります。これは有名な出版社が権威のある専門家に依頼して制作する従来の百科辞典とはまったく違い、ウェブ上で一般ユーザーが衆知を集めて創りあげる事典です。誰でも書き込めるので誤りが生じる場合もありますが、誰もがそれを訂正できるので自然に正確性が高まるというわけです。これはいわゆる「集合知 (collective intelligence)」の代表例とされています。

このように、一般ユーザーが参加し、主役として活動を始めた新たなウェブの形態を取りあえず「ウェブ2.0」と呼びましょう。むろん従来のウェブ(ウェブ1.0)でも一般ユーザーがホームページを制作して広く情報発信することは可能だったのですが、HTMLというかなり面倒な言語を使う必要もあり、ほとんどの一般ユーザーは、企業や官庁などのプロが作ったホー

ムページを閲覧するだけだったのです。

要するにウェブ2.0によって、インターネットは真の双方向メディアへの第一歩を踏み出したと、ひとまずとらえてよいと思います。

従来の、つまり20世紀の近代社会とは、基本的に中央集権型です。中央にいる生産企画者・官僚などが情報の発信者で、全国各地の一般ユーザー（消費者）にむけて放射状に情報が流され、これとともに大量生産された商品が届けられます。ここで単方向のマスメディアが広告宣伝の役割を担っていることは言うまでもないでしょう。だからこそ、国民的スターであるスポーツ選手が、国家規模の消費共同体の象徴としてテレビ・コマーシャルに出演するのです。スターの宣伝する商品は大量消費されるわけです。

しかし、散在する一般ユーザーが情報発信者になるとき、事態はガラガラと変化していくと予想されます。ウェブ情報を追っている人々は、かつてのように国家規模の消費共同体に属しているのではなく、自分の興味のある相手、趣味のあう相手とだけ情報を交換し始めます。それを可能にするのが、ブログであり、SNS と言ってよいでしょう。

いずれにしても、一般ユーザーが情報発信を始めれば、疑いもなく膨大な情報がウェブに溢れかえることとなります。一種の情報爆発ですが、選別されたマスコミ情報とは違って、それらが玉石混淆なのは明らかです。すると、情報の大海のなかから、自分の欲しい適切な情報を探し出してくれる検索サービスがどうしても必要になってきます。まさにその機能を提供して急成長したのが、グーグル(Google)社を筆頭とするウェブ2.0関連の米国企業に他なりません。

たしかにこれは魅力的な新潮流です。大げさに騒ぎ立てる人の気持ちもわからないではない。しかしながら——ここでわれわれは立ち止まり、考えてみなくてははいけないのです。

果たしてウェブ2.0関連企業の検索結果を信頼することは、従来のマスメディアを信頼することと本質的にどう異なるのか。従来のマスメディアを事大主義的・エリート権威主義的と批判し、①ウェブ2.0を民主的とみなす議論の根拠は何処にあるのか。かえって情報の大海のなかで進路を見失ってしまう恐れはないと言えるのでしょうか。

足をすくう検索技術

私はグーグルをよく利用します。ヤフーのようなポータルサイトもレストラン探しのような日常生活的な調べものには便利なのですが、学術的な細かい情報、たとえば学者の交友関係や師弟関係といった情報を得るには、むしろ検索サイトが向いています。グーグルのすっきりした画面デザインもなかなか趣味がよい。文章を書くとき、細かい情報がわからなくて図書館を探し回るのはよくあるのですが、グーグルのおかげで随分手間が省けるようになりました。文章を推敲し仕上げていく段階で、検索サイトは実に有用なのです。

けれども、逆に言うと、検索サイトの情報から基本的な文章のアイデアを得られたことはない、というのも事実です。基本的アイデアは、書籍や雑誌に加え、さまざまな人々との交流から得られることが圧倒的に多い。映画やテレビ番組からの場合も少なくありません。つまり、検索サイトからの情報は、文章の構想ができあがった段階で完成度をあげるためには役立つのですが、思考のフレームワークを作るにはあまり向いていない。比較的短い、断片的な知識が脈絡もなく並んでいるからです。基本的なアイデアというものは、一冊の本を読み通すような、

ある量のまとまった情報にふれることで次第に熟成され、やがて自分の内奥からわき出してくるものなのです。

いや、それは習慣の違いだ、という異論もあるかも知れません。若い人たちは書籍よりもウェブから得た情報をもとに思考する、それが新たな世代の特徴なのだ、というわけです。とはいえ、教師としての経験から言えば、まさにそれが若者世代の弱点でもあると断言できます。

最近の学生のレポートを読むと、いわゆる定型的な知識は比較的きちんと抑えられていて、ウェブの情報検索技術をうまく利用している感じがします。しかし、部分的には気の利いた語彙やレトリックを使っているが、全体としての論旨が通っておらず、文体の統一もなく、結論がいかにも陳腐で取って付けたようなものが多い。複数のレポートに同じ断片的文言が埋め込まれていることもあって、ウェブに載っている文章を切り貼りしていることは明白です。自分で悩みながら大きな疑問に取り組み、そこから重量感のある言葉を紡ぎ出したような、構想力のあるレポートは少ないのです。

これは、若者が受けてきた教育と関連があるのは確かでしょう。受験勉強は短い時間で解答を作成するための勉強ですから、ウェブの情報検索とまことに相性がいい。世の中の大切な問題の大半は短時間で解答できるものなどではないのですが、「知」とはそういうものだ信じこんでいるわけです。授業をしていても、自分のなかで問題を発見し育てて行くというより、既存の知識を要領よく記憶することが勉強だという顔をしています。これでは既存の学説をくつがえすオリジナリティのある成果など出るはずはないし、社会の真の問題解決の道が見えてくることもありません。

もちろん、そんな学生ばかりだというつもりはない。自分で悩みながら思索している学生もいます。しかし、若者にそう思いこませるような強い社会的影響力が働いており、この風潮のもとではウェブの情報検索技術がむしろ負の影響を与えがちな面を忘れてはならないのです。

それでも現在の学生たちは幼い頃に学校でそれなりに体系的な訓練を受けてきているので救いがあります。もっと深刻なのは近未来の子どもたちです。彼らはごく小さい頃からパソコンに親しみ、勉強というのはウェブの情報検索と一体になった知識獲得だと信じこんで育つようになるでしょう。ワープロや電卓の普及で漢字が書けなくなったり計算が下手になったりする経験はおなじみのものですが、これと同様に、子どもたちは身体で学び考えるという基本的なトレーニングを軽視するようになる恐れがあります。「知」とはクイズに答えるようなもの、それならウェブから検索してくればいい、というわけです。

仕事をしている大人たちが、少なからずウェブ検索サイトの恩恵を受けていることは間違いありません。仕事をしていて、ウェブの情報検索技術から得られる便宜は途方もないので、いわゆる実証データをそろえる効率は格段に上がります。とはいえ、このことはまた、われわれが種々雑多な脈絡もない既存データの渦中に放りこまれ、その整理作業のために疲れ果てるという逆結果をも招くのです。

知人のベテラン新聞記者の話によれば、昔は足で歩いて現地取材をし、電話や殴り書きのメモをもとに記事を作っていたそうです。これを割り付けしてきちんと紙面にまとめあげるのは、専門の係の仕事でした。ところが、今は机の前に座ってウェブから情報を検索し、ワープロで原稿を組み上げ、紙面割り付けソフトで記事にしてしまう記者もいるそうです。割り付け係は

省力化で配置換えされてしまい、自分はパソコンが苦手なのでその処理作業に手間取って、記事内容そのものにエネルギーを集中できなくなったと愚痴をこぼしていました。昔より効率があがったように見えるが、実は新聞記事そのものは迫力がなくなったのではないか、というのが彼の懸念でした。

ウェブから検索した情報をもとに書いた情報はまたウェブに投入されます。こうして、ウェブには二次情報、三次情報が溢れかえることになり、たとえ足で取材した貴重な一次情報があっても、呑み込まれて見分けがつかなくなってしまうのです。単に膨大な既存情報に囲まれているだけでは、われわれの思考力や想像力はむしろ衰えていくでしょう。

さらに、便利なはずの IT 機器の導入によって、人間がそれに合わせた機械的な情報処理作業を押しつけられているということも重要です。似たようなことはあらゆる職場で起こっています。パソコン操作は、総合的な判断力や直感力よりもロボットのように正確な定型的情報処理能力を必要とするので、ふつうの人々にとっては決して易しいものではありません。

ウェブ検索にもとづく仕事 that 当たり前になっていくと、ある意味では不便が増していく、という事態も十分ありうるのです。

西垣 通「ウェブ社会をどう生きるか」(岩波新書2頁ないし10頁)

設問1

著者は、下線部①ウェブ2.0を民主的とみなす議論の根拠は何処にあるのかと述べて疑問を示していますが、あなたはどうか考えますか。600字以内で述べなさい。

設問2

下線部②ウェブの情報検索技術がむしろ負の影響を与えがちな面とは、具体的に著者はどのようなことを考えているのか、300字以内で説明しなさい。